

【論考】

多様なグローバル人材の育成と複言語教育

－韓国語教育を中心に－

Plurilingual Education for Training Diverse Global Minded Persons: Focusing on Korean Language Education

関東国際高等学校副校長 黒澤 眞爾

KUROSAWA Shinji

(Vice Principal, KANTO International Senior High School)

キーワード：グローバル人材、留学政策、外国語教育、複言語、グローバル人材育成

はじめに

政府は、2013年の閣議決定「大学のグローバル化に関する提言」の中で、日本人留学生の数を12万人に倍増する目標を掲げている。しかし、その後目立った伸びを示していないのが現状である。(2015年OECD調査等では54,676人)

日本学生支援機構のデータでは近年一定の伸びを示しているが、それは短期や交換留学生を含んだ数字であり、学位取得が可能な正規留学生の数は横ばい状態である。本論考では、中国の1/10さらに韓国の1/2にしか満たない日本人留学生の数が増加しない原因を高等学校の外国語教育の現状に探り、多様な外国語教育の普及が正規留学生の増加につながる可能性があることを考察するものである。

1980年代の韓国留学

まずは古い話で恐縮であるが、筆者の留学経験を紹介しようと思う。筆者は、1980年代の半ばから終わりにかけて韓国に留学した。大学の文学部で日本史を専攻していた筆者は、九州地方の文化史を学ぶ中で朝鮮半島との文化交流史に関心を持つようになり、学部卒業後、韓国に渡った。9か月通ったソウル大学語学研究所は、韓国の大学もしくは大学院に進学を予定している国費の留学生が主に通う語学センターである。留学生の国籍は多様で、ドイツ、アメリカ、ギリシャ、トルコ、イラン、台湾などからの留学生がクラスメートであった。上級までの語学研修を終えた後、3か月間私立の延

世大学の語学堂で上級の特別クラスに通い大学院への入学に備えた。大学院は、慶尚北道の大邱郊外に位置する嶺南大学に入学し、韓国史を専攻した。近世朝鮮期の社会変動を学ぶ傍ら、毎週のように地方に出向き、農村や漁村のフィールドワークをおこなった。長いときは大学院の長期休暇を利用して数週間離島に滞在し、民家に寝泊まりしながら日本の統治時代や経済成長期以前の村の様子の聴き取りをおこないレポートにまとめた。また、当時殆ど日本に紹介されることがなかった韓国の市民文化活動や環境運動に関する記事を翻訳し、関連の雑誌に寄稿したりもした。

社会的に大きな変動期であった1980年代の韓国に留学することができたのは、今思うと非常に幸運だったと思う。民主化を求め当時の軍事政権と果敢に対峙し、粘り強く民主化を成し遂げていく隣国の同世代の友人たちと接する中で、次第に彼らに対し尊敬の念を抱くようになった。日本に帰国後、財団法人アジア学生文化協会に入職、様々な文化活動やアジアの語学講座を企画・運営するようになるのだが、この時にアジアからの留学生たちと水平的な関係を築くことができたのは留学の経験があったからである。さらにアジア学生文化協会を退職後、高校生を対象に韓国語の授業を持つようになったときも、この留学時に培った韓国の友人たちへの尊敬の想いが常に仕事の下支えになってきたように思う。

韓国語を学ぶ高校生たち

2000年4月、東京渋谷にある関東国際高校（以下関東国際）が外国語科の中に新たに韓国語コースを開設することになり、筆者は韓国語教師として赴任することとなった。関東国際は外国語科を設置しており、その中に英語以外の外国語を専門的に学べるコースを有している。韓国語コースは、中国語、ロシア語に続き3番目の開設であった。民間の財団から高校に移った筆者は、教師としては全くの素人で、新たなコースをデザインするのに苦労を重ねた。授業時間割等は先行する中国語やロシア語に準じればよいのでさほど問題にはならなかったが、3年間の教育内容、つまりシラバスの作成や、教材開発、提携大学の選定などは先例事項がひとつも無く、全て試行錯誤であった。まず、韓国の教育機関と提携を結ぶ必要があった。筆者は、韓国語コース開設の前年に韓国に出向き複数の大学と協議をしたが、あまり良い返事がもらえなかった。いずれの大学も日本の高校と提携を結ぶことにメリットを感じなかったようだ。最後に訪ねたキョンヒ大学の国際教育院のみが、関東国際との提携に積極的な対応を見せ、最終的にキョンヒ大学と提携を結ぶことができた。キョンヒ大学の支援を得たことで、韓国語ネイティブ教員の確保、高校生用教材の開発、3年間のシラバスの作成、短期留学プログラムの開発など、コースの教育の核になる部分が出来上がっていった。

開設時には6名だった生徒も、次第に増え現在は各学年で3～40名の生徒が本コースで韓国語を学んでいる。最近ではK-POPブームの風に乗って入学希望者が多く、地方からも入学希望者が集まってくる。そして、コースの運営が軌道に乗る中、卒業後に韓国への留学を希望する生徒もここ数年多い。

最近5年間の韓国の大学（学部）への進学者数は以下の通り。（ ）は生徒数。

2014年度卒	2015年度卒	2016年度卒	2017年度卒	2018年度卒予定
6名（31名）	3名（35名）	6名（36名）	4名（33名）	8名（24名）
延世大 1名 キョンヒ大 3名 成均館大 1名 済州大 1名	延世大 1名 キョンヒ大 1名 ソウル芸術専門1名	延世大 1名 キョンヒ大 1名 梨花女子大 1名 成均館大 1名 東国大 1名 釜山外国語大1名	延世大 2名 キョンヒ大 1名 釜山外国語大1名	延世大 5名 キョンヒ大 1名 漢陽大 1名 釜山外国語大1名

今年度（2018年）は、特に留学希望者が多く、コース卒業予定者24名中8名が韓国の大学への進学を予定しており、これは過去最高値である。この間、生徒及び保護者のニーズに応えるため、韓国の各大学（学部）と日本の指定校推薦にあたる教育提携（MOU）を順次締結して来た。2018年現在、関東国際とMOUを結んでいる韓国の大学は、延世大、キョンヒ大、韓国外国語大学、釜山外国語大学の4大学である。いずれも奨学金授与もしくは学費免除等の待遇を含む条件での協定になっており、基準に達した留学希望者が多い場合は、学内選抜をおこなっている。

さて、上記の韓国語コース卒業生たちはどのような理由から国内大学に進学せず韓国の大学への進学を選択したのだろうか。筆者自身は大学卒業時までは、殆ど留学を考えたことはなく、高校卒業後すぐに正規留学するなど考えても見なかった。そこで、現在韓国の大学に留学中の3人の卒業生に質問調査をおこなってみた。質問項目は次の通り。

- ① 関東国際韓国語コース入学の動機 ② 韓国留学を決めた理由
③ 留学生活について（学業、私生活等） ④ 将来への展望

以下に3人の回答を紹介する。

1. キョンヒ大2年 Tさん

①何より中学生の時から好きだった韓国語を学びたいという気持ちが一番の動機です。都立の高校でも韓国語学習が可能な高校はありましたが、韓国語の学習環境（学習時間や国際交流など）が整っている面で関東国際高校（以下関東）を選びました。自分の意欲だけでなく、卒業生の韓国留学の実績などを見て親も気に入ってくれたようで私の関東への入学を応援してくれました。

②実は韓国留学は中学生の頃からの夢であり、正直在学中も韓国の大学に行くことしか考えていませんでした。その気持ちに拍車をかけたのは在学中に交流した韓国人の友達との交流、また、3年生の初めに参加したキョンヒ大学への短期留学でした。交流を通して感じた現地で学ばなくてはいけない、現地で学びたいという気持ちと短期留学で感じたキョンヒ大学と私の相性が決め手となり留学するこ

とを改めて決心しました。

③私は、今歴史学を勉強しているのですが、勉強が難しい反面、学科の友達がサポートしてくれるおかげで楽しく過ごしています。高校の時にずっと勉強してきた語学とは違い、歴史学は自分が勉強してきたことを活かせるようになるまで時間がかかります。そのため正直やりがいをなかなか感じられず高校生とのギャップに少し気分が落ちこんだ時もありました。でも関東で国際交流をたくさんしてきた分、友達を作る面では問題がなかったため、たくさん友達を作り、友達に支えてもらって今では少しずつやりがいも感じるようになりました。勉強の息抜きに友達とショッピングに行ったり、韓国料理を習ったり、韓国の大学生の文化と言っても過言ではないお酒やカラオケなども適度に楽しみながら生活面でも充実した生活を送っています。また、校内の勉強以外の面ではサークルを楽しんだり生徒会の候補団体に属して選挙活動したこともとてもいい経験でした。

④将来については大学に在学しながらたくさんの可能性を考えています。まだはっきりと決めてはいませんが日本の高校での韓国語教師、韓国の歴史に関する財団への所属など道はたくさんあると思います。韓国の史学科に入ったのも日本人に韓国と日本の偏見のない歴史と歴史に対する韓国人の立場を伝えたいという目標の一步なので、どんな形になるかわかりませんが最終的な目標としては韓国の歴史を伝えられる場を日本に作れたらなと思っています。

2. 延世大1年 Mさん

①1年生から韓国語を本格的に学べるカリキュラムや短期留学などのプログラム、韓国の大学の指定校があるという特色に惹かれ、関東国際に入学することを決めました。

②韓国について知っていくうちに、勉強も遊びも一生懸命な韓国の大学生活に憧れを持つようになり、韓国の大学に通いたいと思い留学という道を選択しました。高校に入学する前から韓国の大学への進学を考えていたため、国内の大学進学を考えたことはないです。そして入学後は留学に備え、語学力向上（韓国語能力試験等）、韓国への理解を深めること、韓国の大学についての調査（特色、カリキュラム等）をおこないました。

③私が通う延世大学は、1年生は全員仁川の国際キャンパスで寮生活をするという特色があります。韓国人のルームメイトと暮らすため、学校に通い学ぶこと以外にも韓国について学ぶことができるし、いいルームメイトに恵まれ毎日楽しい生活を送っています。授業は最初の学期はとても大変で、日本に帰りたくて仕方ない時期もありましたが、課題の多さにも今は慣れてきて、課題をこなしながら韓国での生活を楽しめるようになりました。

④具体的に何になりたいという職業はまだありません、せっかく韓国で留學生活を送っているので、なにかしらの形で韓国に関わる仕事がしたいと思っています。また、人と関わるのが好きなので、なにか人の役にたてるような職業に就きたいと思っています。なので、大学生活で様々なことに積極的に挑戦していき、自分のやりたいことを探しつつ、自分にあう職業を見つけていきたいです。

3. 釜山外国語大学2年 Yさん

- ①中学生の時、K-POPにはまってから韓国語の歌の歌詞や、韓国ドラマを字幕なしで見られるようになっていたと思ったからです。
- ②韓国への留学は中学生の時からしたいと思っていました。でも、韓国留学を本格的に考え出したのは、高校2年生の時です。動機としては、韓国語を完ぺきにマスターするとともに外国での生活をしてみたかったからです。留学先として釜山外大を選んだ理由は、韓国語以外の言語にも挑戦してみたかったからです。ソウルの大学ではなく釜山を選んだのは、釜山に知り合いがいなかったのでゼロから始められるという点と、勉強以外の交流会や行事などのプログラムが充実していたことです。
- ③現時点では、韓国語以外にタイ語の勉強をしながら、剣道部に入り、文武両道の生活をしています。それを通して出会った韓国人や外国人の子達と外へ遊びに行ったり韓国国内旅行へ出かけたりと、適度に勉強して、適度に遊んで充実した生活を楽しんでいます。
- ④まず、来年にはタイへの交換留学を考えています。将来については、留学の経験を生かして、日本に住む外国人を助けられるような仕事をしたいと思っています。

彼らは共通して高校の早い時期に留学を視野に入れ始め、準備を開始している。そして結果的に留学に必要な語学力を身につけ、MOUを使って入学、その後奨学金を受けながら勉学を継続している。高校卒業後韓国の大学に正規留学するためには、高校で一定の成績を修めることは当然のことだが、何よりも韓国語の能力が求められる。現在、韓国政府は留学に必要な言語能力として韓国語能力検定（TOPIK）3級以上を要求している。これはCEFRのA2～B1に相当するが、実際に大学の授業についていくためには3級では不十分である。文系であれば4級もしくは5級以上が望ましい（B2～C1レベル相当）。

さて、TOPIK3級というとかなり高いレベルと思われがちだが、実際に高校でTOPIK3級以上を取得するためには、どれくらいの授業時間数が必要なのだろうか。関東国際韓国語コースを例に挙げながら考えてみたいと思う。

関東国際高校外国語韓国語コース 外国語授業数（2018年現在）

	1年生	2年生	3年生
韓国語	5時間/w	6時間/w	4時間/w 6時間/w（選択）
英語	5時間/w	6時間/w	4時間/w 4時間/w（選択）

上記の韓国語の授業は全くの初習者を対象とした内容で、英語は入学時に英検3級程度を想定して

いる。2018年度3年生のうち、TOPIK3級レベルに到達した生徒は70%、4級レベル到達者は54%となっている。また、英語についてはCEFR A2（準2級レベル）到達者が60%である。生徒個人のモチベーションにもよるが、一般的に英語に比べ韓国語は比較的上達の速度が早いことがわかる。

筆者の経験的な感覚では、初習者でも週4時間程度の授業時間を確保できれば、3年終了までには、TOPIK3級レベルに到達することが可能なのではないかと考える。つまり、一般的な高校の英語の授業時間数（週4～5時間）を確保できれば、韓国語はCEFR B1レベルに到達可能なのである。韓国語は、短い期間で留学可能な運用能力を習得することができる、我々にとって最も身近な言語であると言える。

日本の高校における複言語教育

さて、筆者の専門である韓国語について見てきたが、ここからは英語以外の外国語教育全般について見ていくことにする。関東国際では、韓国語以外に中国語、ロシア語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語を学ぶことができる。（総称「近隣語各コース」）いずれのコースも韓国語と同じカリキュラムで、卒業後に海外の大学に正規留学する生徒も複数いる。2017年度卒業生は、中国3名（上海交通大、復旦大、深圳大）、台湾3名（淡江大、銘傳大、靜宣大）、タイ1名（バンコク大）が正規留学している。日本国内で、関東国際のように2つの外国語（英語＋1言語）をほぼ同時間数学び、同時にレベルを上げていくカリキュラムを実施している高校は数少ない。韓国語の場合、首都圏には見当たらず、唯一長崎県の対馬高校が似たカリキュラムを有し、毎年韓国語能力に長けた卒業生を排出している。

また、文部科学省の資料によると授業時間数に関わらず、英語以外の外国語を開講している高校（生徒数）は以下のようだ。

	学校数	言語数	中国語	韓国語	フランス語	ドイツ語	その他	計(延べ)
公立	478校	15言語	381校 (11,047人)	259校 (8,285人)	123校 (3,448人)	55校 (1,524人)	132校 (3,488人)	950校 (27,792人)
私立	196校	15言語	121校 (6,133人)	68校 (2,838人)	84校 (4,406人)	45校 (1,985人)	42校 (1,150人)	360校 (16,511人)
国立	3校	6言語	2校 (30人)	1校 (14人)	2校 (59人)	2校 (33人)	2校 (100人)	9校 (236人)
計	677校	18言語	504校 (17,210人)	328校 (11,137人)	209校 (7,912人)	176校 (3,542人)	176校 (4,738人)	1,319校 (44,539人)

（平成28年5月1日現在）

この表からもわかるように、英語以外の外国語を授業で学んでいるのは、全国に300万人ほどいる

高校生の1～2%に過ぎない。ここ数年、各言語の若干の上下動はあるが全体としての履修者は増えていない。現学習指導要領では、外国語の履修言語を英語に限ってはいないので（英語を基本として記載しているが）、各自治体や学校の裁量で多様な外国語を開設することはできる。筆者の周囲にも「多様な言語教育を行ってみたい」という管理職は多い。しかし以下のような事項が障壁になり、開設を断念するケースが多いようだ。

1. 科目設定がしづらい。（英語の授業時間数を減らせないので、選択科目で第2外国語をわずかな単位数で設置するか、もしくは総合学習の枠の中で授業展開をするしかない状態である）
2. 学習の目安になるものがない。（学習指導要領には英語のみ記載されており、他の外国語は英語に準ずるとのみある。）
3. 教員の不足（講師確保が大きな問題である）
4. 進路保証が不安定（大学入試の試験科目として使えない。センター入試にドイツ語、フランス語、中国語、韓国語があるものの、初習者が解けるレベルではない）
5. 該当言語に対して社会的なニーズがどれくらいあるのかが測定しづらい。

これらは、関東国際の近隣語各コースの開設時においても障壁であった。これらの障壁に対して我々は次のような方法で対処した。

1については、東京都に「外国語科」開設の申請をおこない、これを認められたことで潤沢な外国語の授業時間数の確保をした。

2については、既存の学習指導要領（外国語科）を参考にしつつ、先にも記述したように海外の提携教育機関と連携しながら各言語独自のシラバスを作成した。

3については、英語以外の希少言語の教員免許を持つ教員の確保が極めて難しい状況の中、東京外国語大学や大阪大学、神田外語大学といった希少言語の教員免許取得が可能な大学の協力を得ながら専門的な知識と経験を持つ優秀な教師を確保した。筆者自身も関東国際赴任に際し、東京都教育委員会に対し臨時免許申請を行い、その後3年間韓国語の免許取得が可能な神田外語大学に科目等履修生として通い、ようやく本免許を取得した。また、関東国際で韓国語の教鞭をとる韓国人教員の場合は、東京都に対し「特別免許」申請をおこない、3年前に当該免許を取得している。

4が最も高い障壁だろう。大学入試の科目にない言語を導入する場合は、安心して生徒が学ぶことのできる進路保証が必要だ。国内外の大学と高大連携協定を結び、一定数の指定校推薦枠を確保しなければならない。関東国際近隣語各コースも学習言語を媒介にして、ここ10年間で大幅に指定校推薦枠を増やした。

5については、さまざまな企業や大学が英語以外の多様な言語能力を持った人材を求めるようになってきている。ビジネスマン向けの雑誌である『日経ビジネス』は、2018.03.19No.1933号で「大事なのは高校一人手不足に克つ新・人材発掘術」という特集を組み、関東国際の東南アジア言語の3コースにつ

いての取材記事を掲載した。タイ語の授業やタイ現地研修の様子、さらにベトナム語コースを卒業し、現在首都圏の水道設備のメーカーに勤務している卒業生の活躍を紹介している。記事の最後は、次のような文章で結んでいる。

— 少子高齢化で国内市場の縮小にあえぐ日本。成長を続けるにはアジア市場の開拓が不可欠だ。が、人口6億人を越えるASEAN市場を開拓できる専門人材はまだまだ育っていない。「ASEANをこれまでのような“工場”としてではなく“市場”として本気で開拓するには、現地の人の懐に飛び込み、心を動かせるコミュニケーション力が求められる。それができる人材がない。」こう打ち明けるのは東南アジア市場の開拓を目指すあるメーカーの幹部。関東国際のOBであれば、そんな悩みを断ち切ってくれる可能性がある。—

また、生徒たち自身が英語以外の外国語学習の意義をどのようにとらえているかについては、関東国際が2016年5月に近隣語各コース3年生120名を対象におこなった意識調査の結果からある程度推察することができる。生徒たちの声の一部を紹介する。

Q：現在近隣語が学べる高校が非常に少ないことについて、あなたは思うか？

A：社会の国際化が進む中、英語だけでなく第3、第4の言語を話せる人材が増えることは大事だと思うから、近隣語を学べる環境が増えるといいと思う。

A：近隣語を学ぶことは、言語だけではなくアジアの国それぞれの文化やマナーを学ぶためにも必要だと思う。

A：最近日本に住む英語圏以外の国の外国人も増え、日本に観光に来る外国人が多いので、近隣語を学べる学校がもっと増えたら良いと思う。英語だけでなくもっと他の国の言語を学べる学校を増やして欲しい。

A：大学などで第2外国語として近隣語を勉強しても結局身につかないことが多いので、高校から専門的に勉強して、将来の仕事に使えるようにするのも大事だと思う。

上記以外の回答も、概ね多様な言語教育を推進すべきであるという内容であった。また、外国語教育の専門家の中からも次のような意見が出されている。2018年7月に行われたSGH（スーパーグローバルハイスクール）検証に関する有識者会会議（第8回）では、以下のような発言がなされている。

「英語以外の言語については、今の高校の現状を見ればどうしても英語が中心になっていくことは否めないが、レベルの問題、また指導者の問題などもある中で、どういう形で英語以外の言葉が高校レベルでもある程度やってもらえるようになっていくのか、そのあたりは今後の課題と思っている。」「英語を言語として学ぶ時代はとっくに終わっていて、英語やいろいろな言語を使ってどう発想していくかという時代に切り替わっていると思う。子どもたちが海外へ行くと、何を伝えていいかわからないという一番根本的な問題にぶち当たる子たちが大変多くいて、英語が話せる、話せないということではなく、何を題材にコミュニケーションしたらいいかわからないという子たちがいる。SGHの中でせ

ひ、さまざまな言葉に触れること、そしてリージョナル型の場合は、その地域に根差しているさまざまな外国人の方たちがいると思うので、地域を興していくのに、そういう方たちの力を借りる上でも、言語の多様化は大変重要ではないかと思っている。」

このような社会の声に答えるべく、公立の高校でも少しずつではあるが第2外国語を教育課程の中に取り入れて、本格的に複言語教育に実施するところが出てきた。例をあげると、都立杉並総合高等学校は、2017年度より1年生全員が必修で中国語もしくは韓国語を履修する教育課程を開始した。また2019年度より都立王子総合高等学校においても「グローバルランゲージ」という名称の第2外国語を必修化する予定である。

多様なグローバル人材の育成に向けて

今後、日本は多様なグローバル人材の育成に向けて、どのような教育政策をとっていくべきなのだろうか。最後に筆者の考えを述べたいと思う。

隣国の韓国では、いち早く高校における複言語教育を開始した。現在政府教育部が定めた第2外国語は、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語、中国語、日本語、ベトナム語、アラビア語の8言語。多くの高校生が英語以外の外国語を学んでおり、必修科目ではないものの、学習者数は日本の比ではない。また、全国に31の外国語高校があり、そこでは関東国際と同様に英語ともう1言語を専門的に学ぶことができる。関東国際と姉妹校提携を結んでいる京畿道にある果川外国語高校には、現在英語以外にドイツ語、フランス語、中国語、日本語の4つのコースがある。これら31の外国語高校は韓国のグローバル人材育成戦略の中核を担うものであり、高校卒業後海外に留学する生徒も多い。果川外国語高校からも日本を初め卒業生の多くが海外に正規留学している。

韓国だけではない。関東国際と姉妹校関係にある中国（上海）、台湾（新竹）、タイ（バンコク）、ベトナム（ハノイ、フエ）、インドネシア（ジャカルタ）、ロシア（ウラジオストック）の高校も、全て英語以外の第2外国語を正式な教科として教えている。日本の外に目を向けると、英語偏重が進む日本の外国語教育は特殊であり、殆どの国では多様な外国語教育を推進しているのである。

筆者は、多様なグローバル人材を育成するための具体的な教育政策として、以下の3つを提案する。まず第1に、学習指導要領の中に「第2外国語」教科を設置し、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、韓国語、タイ語、ベトナム語、インドネシア語、アラビア語などを認定外国語に指定し、学習の指針及び目安等を公表する。第2に、全国各地に韓国の外国語高校のような高校を設置し（公立・私立を問わず）、多くの高校生が英語とともにもう1言語を専門的に学べるようにする。さらに第3に、高校で多様な外国語を積極的に学ぶ生徒たちに対し、様々な面で支援をおこなっていく。例えば、現在英語の検定試験を受験する生徒に対し、政府・自治体は財政的な支援をおこなっているが、これと同様に多様な言語を学ぶ生徒たちが当該言語の検定試験（HSK や TOPIK など）を受験

する際、一定程度の財政支援を得られるようにする。

これらの教育政策を推し進めることで、高校生の時期から言語学習を通して多様な地域への関心が深まり、卒業後英語圏以外の地域に正規留学する学生の数も増えてくると思われる。そして政府が目標としている「正規留学生数倍増」も早い時期に実現可能となるはずである。

最後に、先の関東国際近隣語各コース生に対するアンケート結果をもう少し紹介しよう。

Q：近隣語を学ぶことで、あなたはどう変わりましたか？

A：積極性が増して、相手に対して関心や興味を持てるようになった。コミュニケーションをとることへの恐怖や不安が減った。(タイ語)

A：他人を理解しようと努力するようになった。(中国語)

A：外国語を学ぶことに対して不安が減り、異文化に触れる楽しさと関心が増した。(韓国語)

A：客観的に多譜面から物事を考えることができるようになった。(中国語)

A：様々な宗教や価値観を知り、その人の考えや意見を理解できるようになった。(インドネシア語)

A：夢が持てた。(ベトナム語)

筆者の韓国留学から30年が経過した。いつの時代も海外への留学、特に学位取得をとまなう正規留学は本人の意欲と努力が必要であることは勿論、さらに家族にも精神的・経済的に大きな負担を強いる。しかし、多様な地域への留学を終え帰国した若者は、グローバル化が進む社会にとって換えがたい貴重な財産となる。筆者が提案する「高校における複言語教育の普及」が、現在多くの課題を抱える日本社会の未来を切り拓くことのできる人材の育成につながっていくことを願っている。